特集

《人生100年時代シリーズ》生涯現役～技を磨き継承する～

●問合先　長寿社会課高齢福祉・介護認定係（☎23－2162）

日本の総人口は、毎年減少していますが、令和5年9月現在の65歳以上の人口は、3,623万人で、総人口に占める割合は29・1パーセントと過去最高になり、超高齢社会と言えます。

また、本市においても総人口は減少していますが、65歳以上の人口は増加していて、総人口に占める割合は、国よりも高い約33パーセントと、3人に1人の割合になっています。

しかし、一般的に定年と言われる年齢を過ぎても、元気に働いている人たちがいます。特に伝統工芸に携わる人たちは『職人』として自身の技を磨き続けながら継承にも力を注いでいます。

今回の特集では、超高齢社会の中で、伝統を守り、伝えている職人のものづくりを通して、豊かに生きるヒントを紹介していきます。

レポートをしてくれるのは、青嶺中学校3年生の4人です。4人は実際に伝統工芸品を作っている作業場や工房を訪れ、取材したり、ものづくりを体験したりする中で、職人の熟練された技や熱意、人柄などに触れてきました。

要チェック！

青嶺中学校３年生の４人が、市民レポーターになって取材をしてきました！

生島海斗（しょうじまかいと）さん　吉田敦紀（よしだあつき）さん

前田真歩（まえだまほ）さん　松園心響（まつぞのみこと）さん

職人に聞く①

４人のレポーターは、今回、職人の仕事場３か所を訪ねました。

ここからは、実際にレポーターたちが現場で聞いてきた、職人たちの生の声をお届けしていきます。

松尾　克美（かつみ）さん（74歳）

（有限会社 建具家具工房松尾）

中学卒業後に建具職人になり、弟とともに木製建具を制作し、内閣総理大臣賞など多数の賞を受賞。厚生労働大臣が表彰する卓越した技能者の通称である『現代の名工』の称号を持っています。

Q　仕事を始めたきっかけと仕事の内容は何ですか

父と伯父が建具職人で、中学生の頃から家業を手伝い、自然に父と同じ道に進みました。今年でこの道60年になります。

外部木製建具の障子やドア、襖（ふすま）など、住宅に必要な木製建具を作っています。

Q　仕事のやりがいは何ですか

父と伯父が働いていたときから長きに渡って、多くの人たちから仕事の依頼を受けています。私の代までこの仕事を続けることができているのは、依頼してくれる人たちがいるからこそで、深く感謝し、この人たちのためにがんばろうという気持ちが、やりがいになっています。

Q　ものづくりの魅力を教えてください

建具は、生活の必需品です。私たちが、心を込めて良識的な仕事をすることで、建具が暮らしの中に息づき、建具もきっと喜んでいると思っています。何よりも、お客さんが喜ぶ姿を見ると、苦労が吹き飛びます。

Q　今の目標は何ですか

建具職人になって『全国建具展示会』に出会ってから、一度は出品したいという夢を持ちました。初めて出品してから、25年続けて出品しています。展示会を通じて全国各地の名工の皆さんと交流を持ち、いろいろなことを教えてもらうことができました。

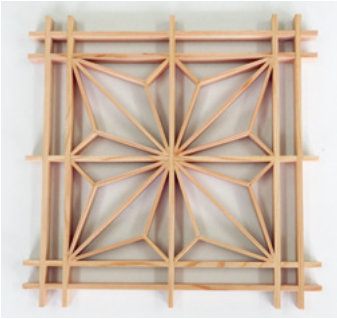
これからは私が、受け継いだ匠の技を守り若い世代につなぎ、恩返しをすることが使命だと思っています。

Q　元気の秘訣（ひけつ）は何ですか

家族で仲良く同じ仕事に携わっていることです。兄弟３人とも同じ建具職人の道に進み、弟たちが私の右腕と左腕となり、支えてくれました。そのおかげで、全国建具展示会に毎年作品を出展することができていたと思います。１人ではできない３人の職人の技のたまものです。

Q　子どもたちにメッセージをお願いします。

まずは、身近な建具や家具、組子に興味を持ってほしいです。また、楽しく働くことの大切さや、ものづくりのすばらしさに気づき、伝統の技を受け継いでいってくれる人が１人でも多く出てくれたらこんなにうれしいことはありません。



↑実際に生徒が作製した組子細工

↑松尾さんに教わりながら組み立て作業にチャレンジ

↑家族の支えがあったからこそ、繊細な模様を作り出す技が身につきました

↑貴重な話を聞き逃すまいと懸命にメモを取る生徒

職人に聞く②

2か所目は、鍋島御庭焼を訪問し、市川光春さんと、その技を受け継ぐ小野麻衣子さんに話を聞いてきました。

市川　光春（こうしゅん）さん（73歳）
（鍋島御庭（おにわ）焼）

20歳から鍋島御庭焼の作成に携わり、自身が制作した焼き物と鍋島焼のＰＲのため関東などで個展を開いています。

Q　仕事を始めたきっかけと仕事の内容は何ですか

鍋島御庭焼は、１６７５年から３５０年続く、鍋島藩御用窯唯一の直系窯元で、この家に生まれたことを宿命と感じ、伝統を守るために後を継ぎました。

仕事は『濃（だ）み』と呼ばれるもので、素地（きじ）に線を描き、輪郭を描いた中を、大きい筆を使って塗り絵のように塗っていく作業です。この濃みは、昔は女性の役割とされていて、私はこの道50年目です。また、東京などで個展を開いていて、その際は作品を紹介するために上京します。このことは大きな楽しみのひとつです。

Q　仕事のやりがいは何ですか

仕事を覚えるのは大変でしたが、作品が一つ一つ仕上がり、お客さんが手に取り眺め、さらに購入してもらい、毎日使ってもらえることがうれしいです。

自分が死んでも、自分が生み出した作品が永遠に残っていくことに幸せを感じます。

Q　ものづくりの魅力を教えてください

焼き物を通して歴史を学ぶことができます。また、たくさんの人と関わりを持つことができることも、生きがいにつながっています。

Q　今の目標は何ですか

あと２年で大川内山に藩窯ができて３５０年になります。伊万里焼をより多くの人たちに知ってもらうための活動などに取り組んでいきたいと思っています。

Q　元気の秘訣（ひけつ）は何ですか

家族みんなの分の弁当を作ることです。孫から「おいしい」と言ってもらえることがとてもうれしくて、孫から元気をもらっています。

Q　子どもたちにメッセージをお願いします

伊万里市は焼き物を作っている人が多いです。多くの子どもたちに焼き物を知ってもらい、ものづくりに関わる仕事をしてほしいです。

光春さんから鍋島御庭焼を受け継いでいる小野麻衣子さんに話を聞きました。

↑焼き物の魅力を語る麻衣子さん

Q　伝統を受け継ぐきっかけは何ですか

この仕事以外は、考えていませんでした。高校生のときには「自分で自分の作品を作る」と決めていました。

Q　仕事のやりがいは何ですか

焼き物は焼くとき以外は常に自分の手元にあります。完成するのが楽しみで、窯に入れて色がきれいになったのを見ると、とてもうれしくなります。

Q　焼き物の魅力を教えてください

焼き物はちょっとしたことでも割れやすい繊細なものです。人に接するように、心を込めて大切に扱うことが重要です。

Q　今後の目標は何ですか

絵付けの技術をもっと向上させていきたいです。

Q　子どもたちにメッセージをお願いします

機械の発達で人の手を使う仕事が減っていると感じています。長い時間をかけて身につけた『技』の魅力を知ってほしいです。

↑食い入るように焼き物を見つめる生徒

職人に聞く③

３か所目は、池田畳店を訪問し、池田徳治さんと後継者の英和さんに話を聞きました。

池田　徳治（とくじ）さん（77歳）

（池田畳店）

祖父の代から続いている池田畳店を３代目として引き継ぎ、現在も弟や息子と畳作りに携わっています。

Q　仕事を始めたきっかけは何ですか

初代の祖父と、２代目の父から継ぐことを期待され、自身もやる気になりました。

Q　仕事のやりがいは何ですか

丹精込めて作り上げた畳を納品し、お客さんに喜んでもらえたときがうれしいです。

Q　ものづくりの魅力を教えてください

畳が出来上がり出来栄えがよかったときに、特にものづくりの魅力を感じますし、とても幸せな気持ちになります。

Q　今の目標は何ですか

今年いっぱいで息子にすべてを引き継ぎたいと考えています。息子にしっかりと引き継ぐことが今の目標です。

Q　畳文化が衰退しつつありますが、今後どのように継承していきたいと考えていますか

古い家には、まだ畳が残っているので、それを守りたいです。新築の家では、カビが少ない和紙の畳を敷くことが多くなりました。今の需要とこれまでの伝統を共存させていくことで畳文化を残していけたらと思います。

Q　子どもたちにメッセージをお願いします

ものづくりはやってみたらおもしろいです。興味があればぜひ挑戦してほしいです。

徳治さんの後継者の池田英和さんに話を聞きました。

↑畳の魅力を伝える英和さん

Q　この仕事をするようになったきっかけは何ですか

やりたいことが見つからなかったときに、父から「畳をしてみないか」と誘われたことがきっかけです。３年間修行をしたのちに、父の元で仕事を始めました。続けるうちに「楽しい」と思うようになり、きついこともありましたが、めげずに取り組んだおかげで今の自分があるのだと思っています。

Q　仕事のやりがいは何ですか

畳を敷きに行ったときに、お客さんから「イグサの匂いがいいね」などと言葉をかけてもらったときにやりがいを感じます。

Q　今後の目標は何ですか

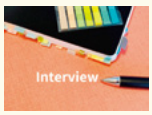
畳は少なくなっていますが、日本文化として根付いてきた畳の伝統をそのまま伝えていきたいです。子どもたちに「畳は良い」と思ってもらえるように、同業者などとも協力しながら、畳の良さを伝えていく活動を行っていきたいと考えています。

Q　子どもたちにメッセージをお願いします

仕事を楽しみ『人のために働く職人』になってほしいと思います。

↑出来上がった畳は、イグサの芳しい匂いがします

レポーター体験を終えて



生涯現役でものづくりをしている職人から話を聞き、単にものを作るだけではなく、伝統を守りつつ後世に引き継ぐための工夫などが行われていることがわかりました。

また、ものづくりを通して人と人とのつながりが生まれることを知りました。お客さんに喜んでもらえるようにと作品を作り上げる職人の匠の技に驚かされ、改めてものづくりの魅力を感じることができました。今回感じたことを私たち若い世代にも伝えていきたいと思いました。

私たちはこれから、高校や大学に進学したり就職したりするなど、たくさんのことを経験していきます。そこにはきっと困難なこともありますが、立ち向かっていかなければいけません。

職人のように『人のために働き、努力することをあきらめない』大人になりたいです。職人の皆さん、私たちのインタビューに快く答えていただきありがとうございました。皆さんの想いを忘れずにこれからもがんばっていきます。